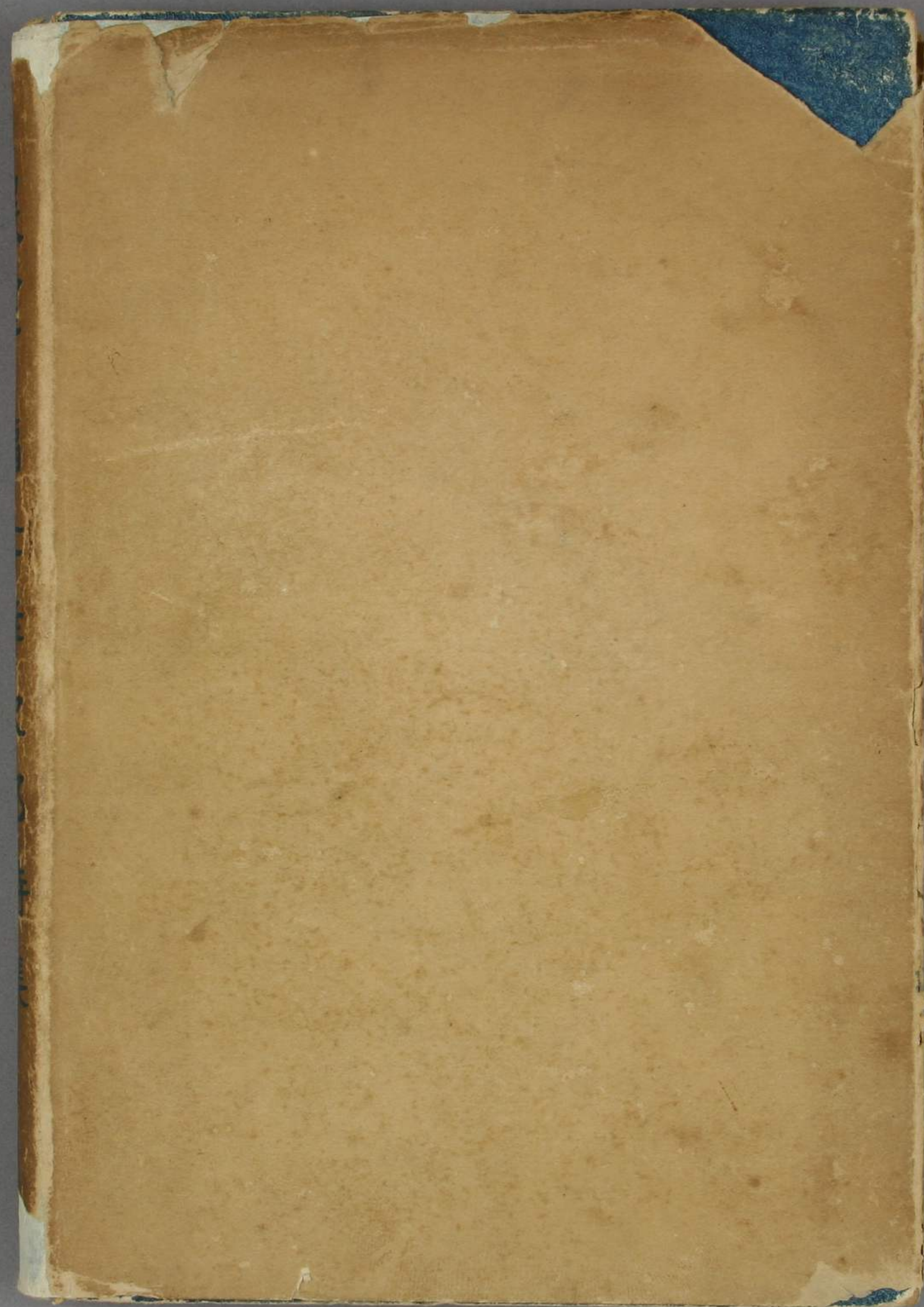


詩集展望



福士幸次郎著

展望
福士
幸次郎詩集



詩集展望

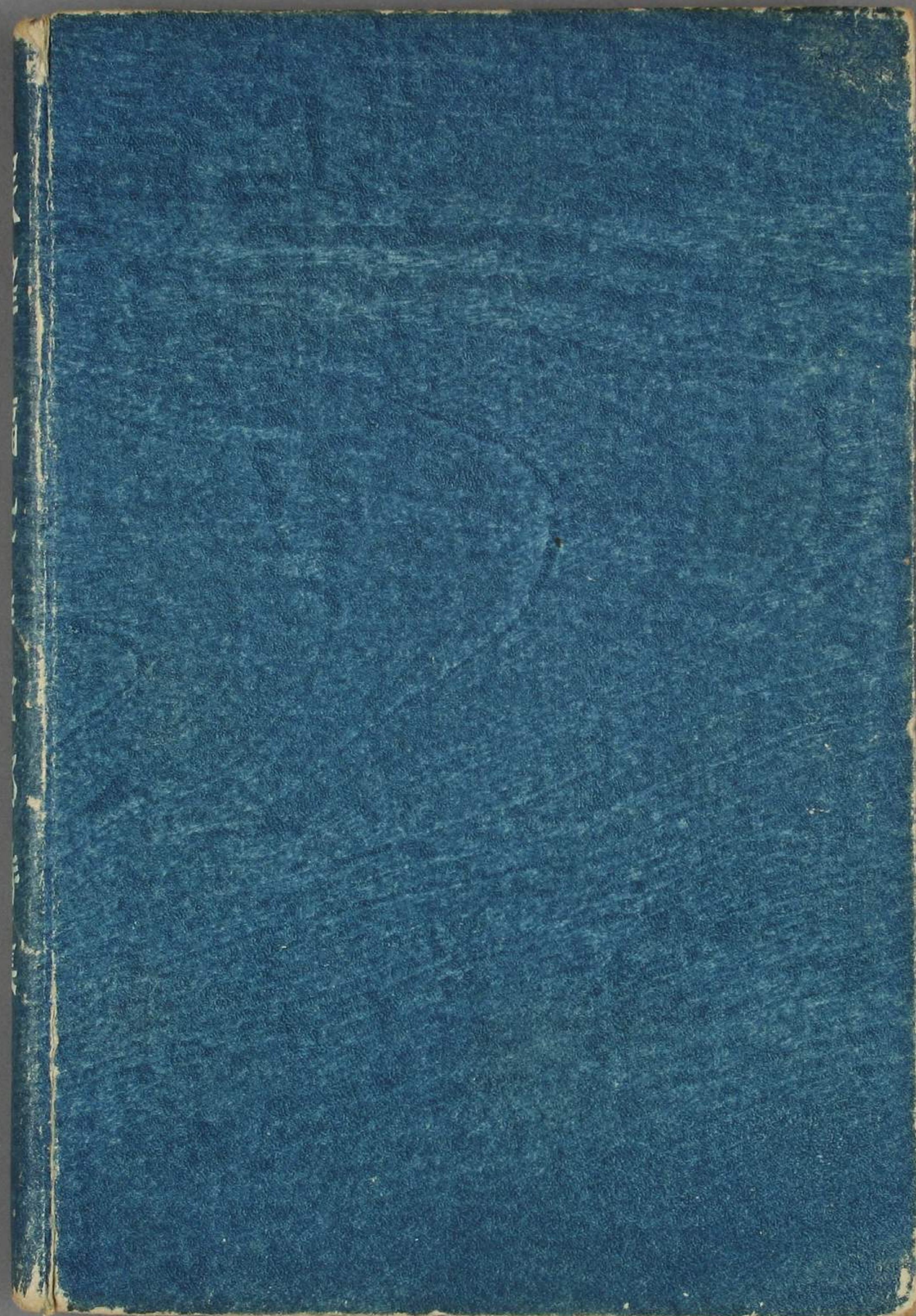


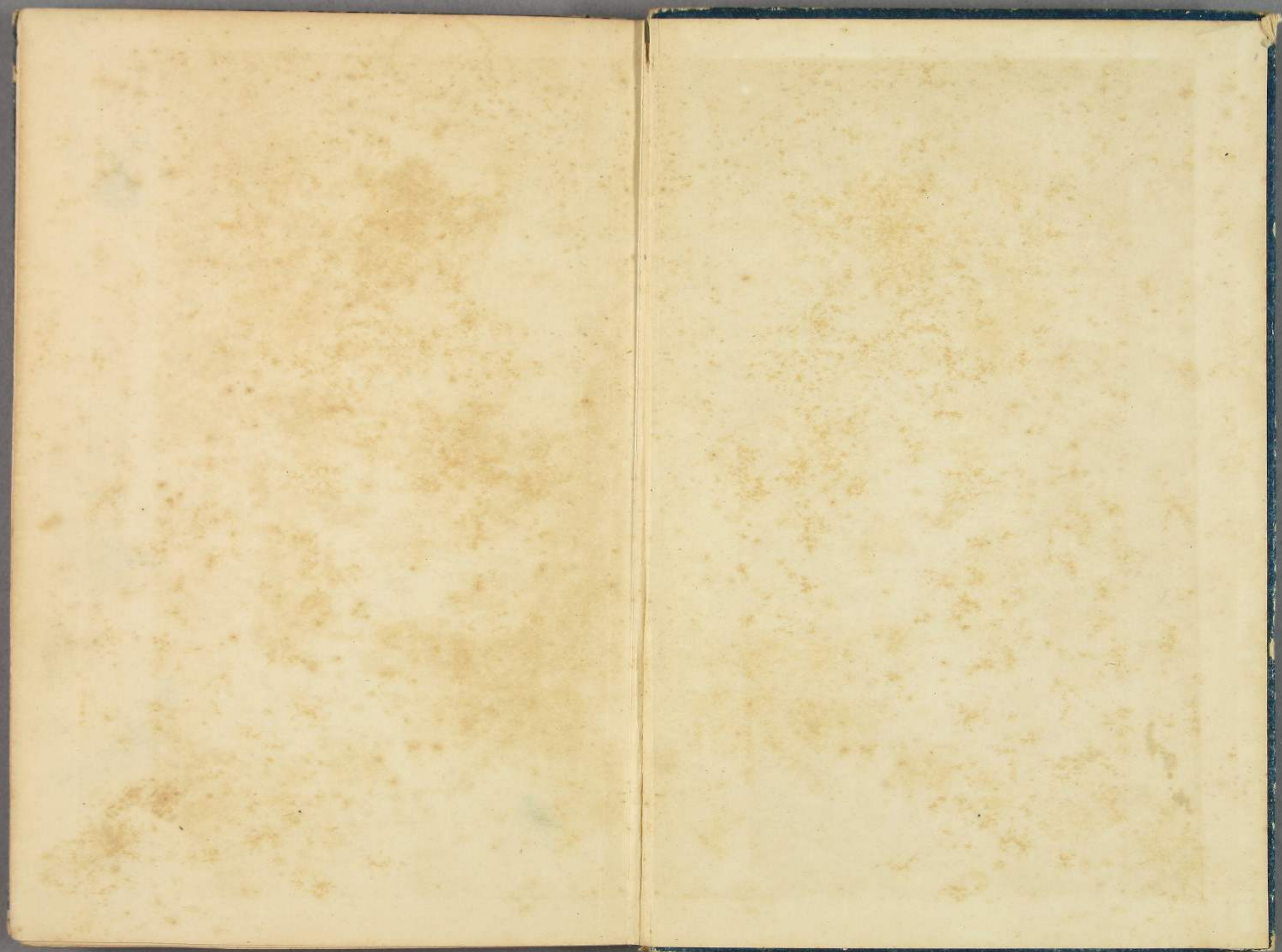
福士幸次郎著

展望福士幸次郎詩集



展望 福土幸次郎詩集





展
望

福士幸次郎著

A elle,

Tu es mon guide...

Dante (Enfers, II, 140)

著者の序

この集は私の既刊の二詩集『太陽の子』の十數篇と『恵まれない善』の全部とに、その後隨時に世に出して、未だ集として纏めてない作全部とを集めたもので、この未だ集にならない部分はその前半を凡そのところ『恵まれない善』と作風を同じくし、その後半はこれらと又變つて一種クラシックの調を帯びて來つたものである。今この『太陽の子』初期の甘やかな感傷と『恵まれない善』の荒い激情とを、抒情詩主義時代と現實主義時代との二段に變遷し來つた私の詩的閱歷の二期とすれば、最後のクラシックの調を帯び來つた現在、その第三段の變化たる古典主義時代とも稱すべきもので、この詩集は即ちこの私の作風上の變遷に應じて、三部に分けたものである。

古典主義に關してはこのイズムに關し日本在來の既定の解釋があつて、その點國典に素養薄い私などは斯く聲言してしまふのを自らおそれるが、現在私の作風が敢てその特色あることを指摘して置いて、それと前の時期二つのそれ／＼特色ある作とをならべて置いて、私の詩的閱歷をこゝに全部展開する。この一目のもとに私の作の諸特徴

を讀者の前に供へること、これがこの集の體裁を探らしめるに到つた主意である。私の作、不人氣なる詩人、私の初めて世に出した『太陽の子』は七百の部數のうち百部も賣れなかつた。第二の詩集『惠まれない善』の公刊は、最も賣行き悪い私刊の雜誌特別號を以て宛て、之も讀者の手二三十に渡つたに過ぎない。私はこの自己の逆運を嘆くために敢てこれをいふか。否、私は自白する。私は自己の作には常に自信を持たない。また其れと同じ程度にこれを世に出す熱心を持たない。公衆？ 公衆とは何？ 藝術は公衆相手の仕事であらうか。私はセザンヌがわが描きをはれる畫を家の敷に常に棄てた心事をよく了解する。私にとつて制作はその瞬間出來る限りたのしまれたる生の活動の氣高い一片である。私は此歡ばしい活動のため少年の如く熱心にその制作に没頭する。それは悲哀の絶頂すらこの活動によつて慰められる。この生の活動より来る自然にして完全なねざらひ、それは私等藝術に従ふものゝ行ふと共に常に報いらるゝ、合理の報償である。私は人氣を願はない。私は生の報いは常に受けてゐる。そして私は常に快活である。

もし私が自己の作を世に敢て出すとすれば、それは吾が悲しむるときことに悲しみ、

また怒るときことに怒り、たのしむるときことに楽しみ、悦ぶるときことに悦ぶ私のそれと心情をともにする世の隠れたる未知の兄弟姉妹を思ふからであつて、それ等の人は恐らく私の拙劣なる作の部分をも、その類似する心理からして、巧みに私の咄辯中の眞意を捉へてくれると思はれるからにある。私は隠れたるこの未知の人々が私のこの集を待つてくれる心地がする。運命の逆と私自身の不熱心よりして廣く世に出すに到らなかつた私の作を、今その最初の作より集めて便宜上三段に分ち、讀者に供へる原因は、この人々ありといふ微笑すべき理由に出づる。私は藝術の價值如何は思はない。それは思ふともこの險惡にして惡騒がしい時代には耳に入らないだらうし、また吾が作にもそれだけの價值あるものが幾らあるか疑問である。藝術制作は人たる生活に與へられたる内最も微妙な活動の一つであつて、その間から生れた作は生の完全な具現物である。吾々は今完全を悦ぶ時代に遭遇してない。その隠れたる心情の世界を思ふべき時である。

大正八年、吾が心情を注いで生きたる年の一つ、
そのクリスマスの夜に

東京田端

福士幸次郎

序

詩

展 望

ああ吾が幾山坂の行路を踏み越えて、
今黑白の霞の岩地輝く斷層の上、
このわが峠路より俯瞰すれば、

山河幾十里の展望、縁の平野白く真下にひろがり、
微かに眼開く蛇のごとき銀色の河、
彼方灰色の霧につつまれたる大都會の帯見える方に、
地の果てに、

底びかりして地の圓い起伏、點在する森、群落する小都會の彩色圖を、
縫ひ縫ひ遠く遠く遠く彼方の果てに走せつゝある……

ああ其の果て、銀灰の霧につつまれた地平の果て、
そこには吾れらが祖國の若い首府あり、
目ざましい吾れらの時代の紅い呼吸、

芽生えの青い感情、

さしのぞく華かな生の眼、

生を愛して心寛なす寶石の胸、

若く雄々しく純かな青春の魂、

すべては今泥と檻褸との大市街に包まれて、

未だ生れず、未だ叫ばず、

遙か彼方、地平の果てに、

黒煙たち濁る地平の果てに、

おお海と平野、空と土地との別れ目に、

銀灰の霧の上に黒い突點を見せ、黒い帯を曳き、

遠く静かに大都會は呼吸しつつある……

ああ季節は今初夏、日は水蒸氣たてこめる中空を薄曇らせ、

光ある眼下の風情をおぼめかせ打和げ、

思ひ深ませる肅かな眞晝時、

天地はさながら私、この未來を不斷に夢見るものに、

その單色にして質まづしい行く手の彼の世界を、夢ならぬ現實の世界を、

その儘、此處に語るやうである。

ああ私等の泥と檻褸との首府、

吾が可憐な生涯を小さくから追はされたその市中は、

吾が半生の闘ひの地、吾が半生の汚れの地、

吾が十代のときからの過去と追憶を葬むる墳墓の地、

おお吾が墓は市内の到る處にある。

少年の聖なる禽獸の眼を輝かした其の最初の時代に、

次いで、絶望の闇い眼を、青春時代に、

狂氣と粗暴の眼を飛躍の時代に、

忽ち喜悅を、忽ち意氣阻喪を自己の建設の時代に、

二〇
おお吾が墓は市内の到る處にある。

ああ吾が墓は市内の到る處にある。

廓街から突き出てゐる泥海の中の島は、

私等中學生の隠れ休む芝草の巢だつた。

青ペンキ塗り剥けた三階建ての古校舎は、

吾れら二十代のものゝ不平と重荷の授産場だつた。

市の東を貫く廣い河は、

人生の單調と孤獨とを夙くから教へた無愛相な死面の寡婦である。

ああ吾が墓は市内の到る處にある。

市の中心を貫く繁華な電車街の大通り、

そこには金と白堊、青銅と硝子、瓦と大理石、

大小建築の軒並屋根高低に立並び、立續き、

いそぐ馬、蹴魂しい自動車、疾驅する電車、すれ交ひ、行交ひ、馳せ交ふ群集、

そこには午前の赤い日、黄金の高屋根越しに照らすけれど、

路上の土塵はまき上り、空中をこめ、半空を掻き濁らせ、

その灰白色な悪騒がしさを迫き立て迫き立て押しこくり、

目まぐるしくも烈しい首府の繁榮をその鈴懸の並木の上に形づくる。

ああ年少の時、私はこの目醒ましい大都會の活動に驚いた。

おお私の光明と満足、そこにも吾が墓がある、吾が無邪氣な過去の崇拜がある、

しかし今にして思へば、この繁榮の上には檻穽の黒い大旗が懸つてゐる。

ああ花崗石の橋、濠割、並木の道路、人馬の雑沓、

そこには人間の壯麗な活動の美は見るに未だよしなく、

唯だ額青黒い群集が馳交ひ、行交ひ、すれ交ひ、

半ば濁れる大都會の華かな光を、忙しく吞む。

ああ吾が生ひ育つた市中のどこに、輝かしい精神がある、

あの滌青色の惡水ひかる濠割、
日蔭少い平地の諸公園、

赤衣裳の番卒の如き諸官省、

木立の葉、土ほこりに白い社、大寺院、大學……

背低くの胸に圓屋根赤く、さながら娼妓の矯態と髪飾りを思はせる劇場、

更に工場、會社、銀行、闘技場、

私等の首府は之れ等大建築物を取巻いて、

ただ雜然として遠く廣く其の鉛色の手をひろげ、波をうねらせ、谿を埋め、丘に連り
濠をめぐり、目まぐるしくも變化なく、素つ氣なく、單調に、單色に、

ああ自然を讚美する心むなし無表情の大都會を作る。

ああ私は此の中で育つた。

此處に、此のただ廣い市民の部落に、

私は育つた。

そこには雨の日、泥の沼遠くひろがる道路、

また風の日、褐色の手で、町を叩きふせる屋外の砂埃り、
おお梅風沐雨の乞食の市！
わたし等は自然に闘ふ威力のない大都會で育てられた。

ああ吾が半生の闘ひの地、汚れの地、

今この斷崖より遠く見て、

幾山坂の行路をかへり見れば、

鋭い追想の情、吾が眼の力を一層鮮かにし、

おお眼の前を走る多數の檻樓の市の民、貧者の酒場、燈の町、灯の影暗祕密の路次、

嘗つては吾れもその仲間であつた生活の、

おおその肉身の思ひある共同の生活の、

過去一切の眞と質との姿を今ありありと捉へ得て、

吾が未來の夢はまたこと新しく空に浮ぶ。

目次

序詩

展望……………一

第一編

鍛冶屋のぼかんさん……………五

窓から……………七

扇を持つみなしごの娘……………九

哀憐……………一一

娼女……………一三

風見の鶏……………一五

記 憶	一七
冬 の 日 暮	一九
幸 福 の 日	二〇
發 車 前	二一
智慧の實を食べてより	二五
冬	二六
風 景	三〇
白 の 微 動	三一

第二編

洪水前の夜の REVERIE	三七
友 情	三八

ボヘミアンの歌	四六
發 生	四九
航海の歌	五一
ああ平原のかなたに	六〇
山上の火よ	六三
靈を照す光	六六
昏 睡	六八
恵まれない善	七〇
死 の 歌	七二
夜 曲	七七
幸 福	八〇
嵐の中で	八一

熱を病んでる星	八二
泣けよ	八五
誰が知つてゐる	八八
曲つた木	九〇
被虐待者	九三
冬越しの牧場	九七
小さい花	九九
天上の戀	一〇一
番人の娘を戀ふ	一〇三
荒廢	一〇四
一人の旅人	一〇六
獵師	一一一

船乗の歌	一一四
この殘酷は何處から來る	一一五
發狂者の獨り言	一二六

第三編

感激	一二四
感謝	一二五
禮儀	一二七
哀歌	一二八
騎士	一二九
鴿	一三〇
夜語	一三三

編

普

惜

目次了

一四八

鍛冶屋のぼかんさん

梨の花が眞白に咲いたのに、

今日もまた降る雪交りの雨。

濁り水は早口に鍛冶屋の樋へおどり込み、

眞裸な柳は手放して青い若葉をぬらしてゐる。

此處の息子はぼかんさん。

とんてんかんと泣く相鎚に、

苺の初熟が喰べたいと、

鐵礮臺を叩くとさ、

手をあつあつとほてらして叩くとさ。

ああ、夢ならばさめておくれ、
ぽかんさん、

此の世の中に多いものは、
祕藏息子のやもめ暮らし。

時計の針の尖のやうに、
氣の狂れやすい生娘暮らし。

この年月の寒暑の往來に、
私の胸は凋んだ花の皺ばかり、
私の胸はとりとまらない時候はづれな食氣ばかり。

窓から

死ぬるを忘れた青い鳥の羽、
軟い光はガラス窓を廻り、
閃く林の黄色い日。

落した直覺の跡を微笑み、
机の香ひを嗅いで、軽く打つ時、
羽擦り合せる樹の上の鳥！
歡喜のさとさで漁るに速い
その嘴を逸し給へ、
貪婪な睡眠者の樹の中の蟲！

あたたかく軟い冬眠の歌、
空から落ちた神話の巨人も
此の軟い歡喜を見たらうか。

廻れ、廻れ、羽蟲の群れ、

透明な羽の香ふままに、

古い花にも似て空氣の光るのを、

小歌こたをあげて烟の立行くままに！

扇を持つみなしごの娘

扇の中にみなしごは、

白い虚うつろな眼を閉ぢる。

病氣上りの氣のやみに、

まぶしく照らす赤い夕日、

風にふらふらうごく雛ひな器き栗、

心覺えの兩親ふたねやが心の何處かにあるやうに、

所々しょくにきらきらと清水しみずが涌く。

ああパウルのやうに嚴いさくて、ペテロのやうにやさしい院長さん、
私が此方こちらへ初めて來た日には、

あのお天日様目掛けて飛んでゆく鳥みたいでした。
そのくせ夜になると魔れたり、
泣き出したり、
知らぬ他國の夢を見て、
暗い廊下におびえて居たり……

哀 憐

別れて後は、
永く哀憐の涙をこぼす。
別れ路にはうまごやし
が咲いてゐた。

その花の面影は
何時も黒い頭巾をかぶつた尼僧の影、
日が曇ればそのあたり、

灰色の霞がしづかに走り、

日が照れば目に見えず、
昨日の雪は消えてゆく。

2 X

娼女

千夜萬夜の燈明の街に、
咲いてものがなしい月のダリヤ。

生な眼色は燐火を吸ふ青びかり、

肌着の緋襦袢にぬくぬくと、うつめる頃の心細さ悲しさ。

ガスはかがやくとも、

座敷の夢はとほく曇り、

白粉にとかされた涙にぞ青白いガスマントルの疲れやう、
廓暮しの疲れやう。

赤い唇に寢息を吸ふ月のダリヤ。

一三

赤い唇に寝息を吸ふ月のダリヤ。
人足^{ひとあし}くらい江戸町に、
月のダリヤのメランコリイ。

43 XI 18.

風見の鶏

風^{かぜ}にせはしい風見^{かぜみ}の鶏、
草間^{くさま}には赤い影^{かげ}這^はふ壊^{くわ}れ屋^やに、
オランダ服^{おランダふく}の十歳^{とせ}ばかりの子が、
はねだま草^{はなだま}のつやつやしい
あのつやつやしい黒い珠^{たま}に
唇^{くちびる}つぐむ氣^きのほそり。

風見^{かぜみ}の鶏^{けい}はせはしくも、
金具^{かなぐ}のペタルに明^あるい冬^{ふゆ}の日^ひを、
一日^{いちにち}おくる遠^{とほ}い遠^{とほ}い風。

さびしくも散歩して、
吹いてゆく風を思へば、
めまぐるしい金具の鶏、
あの金具の鶏！

515.

記 憶

軒ランプもつかない場末の町を
暗い心で歩む……

片隅から――

かげのひかりは奥に浮き、
暮れてゆく小川には家々のうごかない薄暗。

ところどころに橋があり、
落葉した並木の
一列にかさたりつゞく梢。

14

老い朽ちたやうな嘆息の消えがたく、
暗い心でただ歩む……

冬の日暮

吹きわたる風はとどまらず、
黒いたそがれの町外れに、
ガスはほとつき出す。
かはいた郊外の芝原に霧はながれはじめ、
とある一軒家の二階からは、
ぽろんぽろんとピアノの音色がおどります。

路にしみる日暮がたの寒むさよ。
身にしみるピアノの音色よ。
私はそろそろ黒い林の多い、
冬の旅仕度を思ひ始めた。

幸福の日

何時でも謂ひ知らぬ惱ましい日はゆく、
幸福は古ぼけた鉛人形のやうに、思ひ出と陰影をかき消して、
またも嘆く一絃琴……。

その坂には若い檜林が葉を匂はせてゐた。
打續く單音の琴の音は私の過去に立ちかへり、
聞くままに草間を鳴らす羽蟲の翼の音よりも靜かに嘆く……

發車前

低い空はぼんやりと街の灯をうつして、
薄月に小雨が降り出した。

夜行列車の振鈴は鳴り渡つて、
一時に動きはじめ群集の呼び聲。

ああ私はどこへゆく？
ぞろぞろと改札口を出る群集、
かすかな眩暈からふと目がさめて、
私はベンチを離れた。

ああ私はどこへゆく？

ただ一人うちしほれて歩むプラットフオオム、
鎖した歎きは何時までもほどけず、
ただ一人うちしほれて歩むプラットフオオム。

人混みにときめかぬ處女の胸、

其の胸は病みおとろへた私の胸にある。

其の悲哀は時を打つ振子のやうに、

術なげに時を打つ振子のやうに、

思ひ出しては鉦をならす。

その追憶は病みおとろへた私の胸にある。

ああ、あなたは今どこにゐる？

うすむらさきに吐息する白熱燈、

あなたの微笑した顔はどこにある、

人影がいり亂れる蒼青なプラットフオオム。

たよりない人生に、

嘆息はほろびず、

世にない人に、

くちびるはふるへる。

さびしくも唯だ一人どこへゆく？

薄月に小雨が降り出して、

ほのあかるい夜の空、
さびしくも唯だ一人どこへゆく。

2 VI 27

智慧の實を食べてより

栗の樹の下を歩けば、
ふかい落葉の中に
君の吐息たち、
わたしの吐息たち、
何處で鳴くかもしれぬ山鳩の聲は、
梢に唯だ一つ残る黒い葉のやうにふるへる。
もの寂しく遠吠えする果樹園の番犬、
突然鋭く發射する連發銃の反響、
遠い山脈からは雲一つうごかず、

遠いあさぎ色の麥畑のそよぎまでも、
日は悲しげにしんと照らしてゐる。

此の時堪へきれないやうに君の暗い影は、
空とぶ鴉のやうに私の胸へ落ちた。
手錠のやうに籠のやうに、
おもく呼吸ぐるしく私の胸を抱きしめた。

ああまたしても私等は悔いるのか、
あの遠吠をする犬のやうに、
罪と苛責に吠えるのか。

うらがれ時の果樹園に、
しらじらしくもふるへる白い日の光、
その薄寒い木立の奥に、
犬は悲しげに吠えてゐる。

冬

かざりない生活の

町の街燈——

微笑しながら涙をふいて町の街燈、

降りそそぐ柳の露は

絶園なく甃石に咬けり。

行交ふ人影は下に降りこめられて、

暮れてゆく一と筋の水のひかり、

とある街燈の油壺には、

灰色な波の薄明かり……

斯うしてつぶやく夜が来た、

薄ら寒い壁の感觸に、

油の焰は河口のガス燈のやうに、

降りそそぐ柳の露は、

河口の波にふるへる。

薄ガラスの家守の腹は、

銀の陰影に吸ひついてゐる。

風景

雲は祈禱の胸を打つ景色、

雪伏す野川に氷を浸し、

冷たい灰色に身をふるはす祈禱……

透きとほる北風に祈りは叫ぶ、

霧に荒野の森は漂ひ……

MEIJI 41—

白の微動

中空の輝き、

並木の梢は尖り、

目覚めた光は建物の角かどに、

鮮かな煌きの夢を抱く。

廢れた洋館の空氣の

空しい音は遠ければ遠いほど……

擦り合ふ樹林に

かすかにかかる

晝の思ひに慄ふ壁のにほひ。

あゝ、崩れ掛けた壁に
日光の漂ひの
輝かしく、又痛々しい
單色の顫動、

冷笑の鋭さ——
亡びた空想を嘲ける色、
胸もあらはに投出した
其の崩壊！
跡！

煌き、波だつ光のうへを
冬の日に残りなく
微動しわたる

第
二
篇

洪水前の夜の REVERIE

—

警鐘が陰気に響いてくる。

永遠の夜氣はその相間にしんとした闇をたどり、

檐の寢鳥はくくくと悲しさうに空氣をふるはせてなく。

河口、街角、工場の屋根などが寂しい睡けに渦巻いて、

私は何時からとなく寝ついて今またふと目が覺めた。

蠟燭が遠い銀色の過去をちらちらさせながら燃えてゐる、

しつとりと濕つた悲嘆が私の影法師を深く迷はしてゆく、

ひそやかな葉摺れが空中に消えると、

其のあとしんとして雨氣が窓から溢れ動く。

嵐はあらゆる追憶を残して夙の大往昔に死んでしまつたらしい。

三八

雨樋からはぼとりぼとりと絶え絶えに落つる水音、

あれは何時迄も止む事なく落つる孤獨の響きだ。

天井窓からはしめやかに空氣にまじる雨氣の薄明り、

あれは濡れた瞳を投げる底なしの鏡だ。

白い敷物は半睡の奥におしひろがり、

蒼白めた鏡は悲哀の室を見つめて、

この一夜の魂をまもるらしい。

ああ眠つた間も蠟燭の焰をちらちらさしてくれ、

ひそやかな葉摺れにうつつなく私が思ひは深い淵をばなきめぐる。

ああ眠つた間も焰をちらちら鏡へうつしてくれ、

ひそやかな葉摺れに消え入る思ひして私の夢は蒼白い眼を沈めてゆく。

二

嵐は世界を靜かな涙と追憶にした。

私の睡眠の底には、

あふれる河が流れてゆく。

私の魂はつめたく浸されて、

水音に風は泣き、

其の魂を開いてくれと、

葉摺れは空中にそよぐ。

三九

私にはあの葉摺れのひそめきは捉へられない。
胸へ落ちて来る闇黒のほのめきには果がない。
水に浸されて身慄ひする梢の繁り、
すすり泣きながら消えてゆく風には果がない。

三

私の追憶は何時の間にか白い餌魚を洗めてゐる、
盲ひた中を手探りで夢とうつつに歩いてゆく、
雨あしがたち消えながらも何處の樹からとなく私の膚を冷してゐる時、ふと紅い珊瑚
の人魚が眞着な腹を水に潜らせる。

鏡はまたも永遠の暗となり、

老年の追憶は吐息をつく、
そして蠟燭の焰がちらちらする。

あれは屹度物言はぬ幾千年の魚だらう。
老衰者の悔や執念を悲哀の箱で胸をふさがせ、
泣いてるやうな笑つてるやうな死顔を
夜長の眠られぬ夜ちらちら鏡へうつすのだ。
霧雨の空洞に響きなき鏡、
その鏡は三本の格子を滲ましてぼんやりと天井に涙ぐむ。

半睡の室内では蠟燭がちらちらと、
遠い水音や葉摺れの憂愁や其の空中に消えて行く幾千年の沈黙に、

銀の影を薄く壁にそよがしてゐる。

四二

何處かでは固パンをかじる鼠が練絹のカアテンにひそんで啜泣いてゐるだらう。
或る温室では釣鐘草や葵や棕櫚が頭を振つてゐるだらう。

あらゆる時間は青ざめた歴史を編みながら雨中を押流されてゆくだらう。

休止した時計の振子は

永遠の底へ沈んでゆき、

私の生命は樽のやうに冷たい空洞を流れてゆく。

友 情 (千家元麿に)

ゴールデンバットを吸ひながら、

僕は日の暮れ方の倉庫街を思ひ出した。

赤く金をかすつた斷れ雲が、

空いつぱいに光つて居る、

一群の屋根草が同じ色に染まつて光つてゐる。

河沿ひの倉庫は一列になつて、

堀割りの水深く落ちてゐる。

その水はいつも流れず、

いつも淀まず、

むねもあらはにさらけ出して、

四三

冷たい嘆きをうつしてゐる。

僕はそのあと二た月の間、
死身^{しんみ}になつて心を鞭つた。
襲ひくる薄はだの寒さに、
つねに氷のゆめをつくつた。
日陰の鳥は羽ばたきして、
つらい牢屋のゆめをつくつた。

今こそ僕の肉體は、
悪熱を病んで居る。
肌身はなさず或る友の肉體を、

つねに戀ひしたうて慄へてゐる。
常にせぐりあげて慕ひ泣く聲を、
肌^{はだ}に耳あてて聞いてゐる。

ここにまことの愛があつた。
いつも流れず、
いつも淀まず、
むねもあらはにさらけ出して、
互に烈しい熱にふれあふ愛があつた。

ボヘミアンの歌

嵐は過ぎた、

洪水は過ぎた。

唯だ流れてゆくのは河の泥水ばかりだ、

土堤の柳の樹は、

すんだ滴をたらしてゐる。

砂は踏むたびにぐさりぐさりとつぶやく。

土堤のくび根までだぶりだぶりと浸して流れる大河、

だぶりだぶりと両側の岸を浸して

流れる大河、

おおこの空に高く飛ぶ燕の群れよ、

何處をさして行くとも知れない燕の群れよ、

僕は君等を見る時親しい憧れを感じる。

そのぺちやくちやしやべり交して行く聲を聴くと、

つひ可笑しくなつて笑ひ出してしまふ。

自分はボヘミアンだ、

けれども人生の底から根ざしてゐる愛がある。

はてしない際涯は自分のラヴァだ。

昨日のあの嵐の名残りで白く崩れる

河口の波は、

人氣もないそのあたりの葦の茂みは、

愛するものの睡つてゐるたのしい處だ。

自分はそのに棲家を見出す。

おお河尻よ、

限りもなくつづいてゐる砂原であれ。

おおそこから見える海よ、

限りもなく廣いをやみない動搖であれ。

自分はそのまだ見ない處に、

小踊りしながら進む、

嵐のあとの何人も踏まない土堤の上を、

はにかむやうなあたりの景色に溺れながら、

だぶりだぶりと鳴る響きのよい、

水音を聴きながら。

發 生

女よ爾の罪は赦されたり『馬太傳』

僕は別な空氣をすふ、

別な力を感じる。

僕自身はもう草だ、

新しい發生だ。

突きあたりつきあたり、

そして突き破り、

突きやぶり、

吾等の行く先の魂をつかみたい。

途徹もない世界の果に、

眞實な産聲うぶこゑをあげて、
底力ある目玉をでんぐりかへしたる。

航海の歌

おお殉難者、
殉難者、
私は泳ぎも知らないで、
泳いでゐる。
私は海中に投げこまれた、
手をふり足をふり、
もがいてゐる。
私は赤子である、
一羽の鷗にも及ばない。
死ぬのが怖くて唯だじたばたしてゐる、

からだを浮かしてゐる。

おお力出す人間、

力出す人間、

私はそのうちどうやら泳げるやうになつてきた。

そのうち水のまにまに流れる丸太を見つけた、

私はそれをたよりにして泳いだ、

また私と同じやうな人に幾らも出逢つて、その人等と握手し合つた、

私と同じ水難者であつた、

皆んな同じやうな目をくぐり抜けて來た。

私等は合力して筏を作つた、

めいめい持ち寄りの丸太を集めて筏を作つた。

それから永遠の潮に掉さした、

帆をあげた。

波は荒くとも、

しけであるとも、

私等は行きつく果てまで行く歌をうたつた。

おお敗残者よ、

敗残者よ、

私等は多くの溺るる人を遠くに見た、

私等はそれを見過して行かねばならなかつた、

私等の目の前には常に大きな敵がある、

いき引くばかり空中をあふつて來る熱風、

大旋風、

出づる處を知らずまた行く處を知らない敵よ、

私等はそれと闘つて行くのだ、

山から山へ波のうねりをのして進んで行くのだ。

ああ目なく耳ない氷山よ、

永遠に背を見せて走る潮流よ、

私等は無言の恐怖の世界のなかを、

前のめりに進んで行く。

おお敗殘、

みじめ、

底知れぬ波間に溺れゆくものよ。

君等をふり棄てて行く氣は堪へられないけれど、

私等の目の前には恐ろしい敵がある、

後ろ髪をひかれながらも、

私等は前のめりに進んで行くのだ。

ああ弱いもの、まゐつてゐるものは永遠に振り棄てるのだ、

いつ逢ふか知れない世界に離れ離れになつてしまふのだ。

おお筏に折よく這ひ上がった人は這ひ上がりたまへ、

掉をさし、

帆をあげ、

舵をまげる、

その船頭役は吾れ吾れ小數者がやつて行く。

吾れらが舷燈は唯だ一つしかなく、
吾れらが舷燈は船首にかかつてゐる、
吾れらが舷燈は光力は鈍いが、
吾れらが舷燈は行く先きを照らしてゐる。
油壺の油は吾等の涙である、
深い涙である、
夜の暗を照らしてゐる、
斯くして永遠に吹きつゝの風に逆うてゆく。
暗の落ちつく先きは知らないが、
斯くして進んで行く。
ああ揺すれゆすれて休む間もない吾等の筏に、
夜な夜な輝く星よ、

ふきつゝの嵐よ、
大うねりする波の回轉よ、
そのたけり聲よ。

夜が明けて晝になる、
荒れはやむ事はない、
ああその中に見る、
太陽よ、
吾が血を充ちふくらせるその熱度よ、
空中にがんとして燃える大銅盤、
おおその下をふく熱風、
あらゆる生物をしをれ返へしてゆく極熱風。

あるひは霰ふり、
吹雪ふきちり、
氷山流れ、
埋葬の黒い鳥がさけぶ。
極北よ。

ああ吾が筏はかかる中をゆく、
ああ吾が筏はかかる中をゆく。
陸にゐるものは知らず、
遠くにわかれわかれに溺れてゐるものは知らず、
目見えぬものは知らないけれども、

ああ吾が筏はかかる中をゆく、
ああ吾が筏はかかる中をゆく、
充ちふくれて行く格闘の力を感じながら、
えいえいえいと乗り切つて行く。
いつかはこの暴逆な大洋を自由自在に乗り廻し、
あらゆる嵐、

熱、

みじめ一切を外にして、
氷結、睡り、死一切を外にして、
強烈異常の船一艘、
作る力を感じつつ。

ああ平原のかなたに

ああ平原のかなたに

夜はまだ明けない。

星は霧の中にささめき、

水蒸気は冷く叢をうるほしてゐる

わが命は濡れて渴くことなく、

わが戦ひの旗は肩越しにしをれてゐる。

ラツパは夜なかの夢をつづけ、

兵隊は闇間に起き伏す草のやうに眠つてゐる。

かかる中にわが魂は目醒めて、

一線になつてゐる敵を見る。

遠い睡つてゐる地平線のさきを見る。

葉摺れの中にただひとりめざめて、

永遠に醒めてゐる目が一つある。

それが敵を見る、

睡れる味方と敵の中に、

唯ひとりめざめてそれを見る。

山上の火よ

山上の火よ。

爆發する淺間よ、

灰色なる暴風よ、

流るる如く梢を靡かせる山林よ、

をやみない流動の聲よ。

君は絶えず爆發する、

唸る、

電を閃めかす、

東京の靜かな街まちの十文字に自分がふと立停るとき、

四方に電車が別れ別れに速去とほざかるとき、

自分は君を思うて嘆息する、

憧憬する、

ああどこにああいふ強い力が君にあるか。

爆發せよ、

君よ、

街を人は歩いてゐる。

煙草屋の店先に三四人ひと集りざひしてゐる。

おお爆發せよ、

君よ、

灰色の暴風を吹き給へ、

おお自分は嵐を讃美する。

都會の屋根が大雷雨の下で、
青くひつそりとしてゐるのが好きだ、
暗い中からぴかりとするのが好きだ、
あちちこまれる人間よ。
息を殺してゐる人間よ。
目に見えない力が、
僕等の眼に迫つてゐるのだ。
暗闇にさして來る大潮のやうに、
この日中に裸出してゐるのだ。

おお空中よ、

埃で眞白い

この中に嵐が潜んでゐる。
爆發がひそんでゐる。
全世界の祕密が常に隠れてゐる。
自分はその大道を大跨で闊歩してゐる。
どしりどしりと歩いてゐる。
そして腹の底からわなないて來る歌を感じるのだ、
勢ひのよい眞に微妙な歌を感じるのだ。

靈を照らす光

ああ自分は泥も吞みました、

きたない水も吞みました、

私の腹は黒く、

私の咽喉はやけてゐる。

ああこの中に何ものかきれいなもの、

ああこの中に何ものかしみとほるもの、

ああこの中に魂がやくアル・ゴール、

その泥水を油とし、

その腸を油壺とし、

暗夜を照らす不斷の燈、

不滅の燈、

汝の暗い靈を照らす光たらしめよ。

地獄極樂、

夜の燈、

天魔惡鬼の、

よるのともしび、

ああ輝けよ、

輝けよ、

踏しるべせよ、

輝けよ！

昏 睡

一人の男に智慧をあたへる、
一人の男に黄金のかたなをあたへる、
一人の男に火をあたへる。
その男は睡つて正體なく、
髪はぼうぼうとのびて、
さながら酔ひどれの如し、
泥の如し。

鳥は巢に鳴き、
風は林を吹く。

ああ眠れる日はどろんとよごんで、
今大洋の水平線上に行く。

この男に聲をあたへ、
この男をゆりさまし、
この男に閃をあたへ、
この男を立たしめよ！

恵まれない善

自分は善を欲する、

自分は善を欲する、

何ものにも恵まれない善、

あえかな微笑、

遠い大洋のなかに涙する鳥、

帆なく舵なく眠れる船、

その黒い唇に、

齒は白く露出して、

永遠の海底を行く魚の如し。

ああ波切る舳、

空映す波、

不斷に帆桁きしる風は、

目に見えぬ黒い旗の如し。

ああ何もの、

何もの、

この力あたへる真空の内、

一物の響なし、

一物の響なし。

死の歌

『おまへはどこから来た』と夜の木の葉がささやく。

『おれは冬の地平線の先きから来た、

まだ夜の明けない土地から来た』と風がささやく。

『ああおまへの聲はすごい。

お前の聲は弱弱しく、

かすかだが、

いつまでも耳を離れない』と木の葉がささやく。

『それはさうだ

おれは死の地、死の陰に坐せるものから来た。

永遠に光のない土地から来た』と風がささやく。

彼等は互ひに見つめあつた、

木の葉はそよいだ。

風はそそよと吹いた。

彼等は耳こすりした。

接吻した。

それから風は行く果も知らず飛んで行き、

木の葉はたえ間もなく身をふるはせた。

『ああおまへはどこから来た。

どこから来た』と暫くあつて木の葉はまたそよいだ。

『おれは遠くから来た、

光のない土地から来た、

今来たものあとへ續いて来た』と別の風がささやいた。

『ああおまへの来るのは止む間もない、

あとからあとからと續いて来る』と木の葉がささやいた。

『それはさうだ、

おれは永遠の意志だ、

行つて行つてとまる事がない』と風はそよそよと吹いた。

『おまへの来るところには寒氣がする、

おまへの来るところには氣持よい影がない、

おまへの来るところにはあらゆる生きたものが、

すがれてしまふ』と木の葉がささやいた。

『それはさうだ。だがあれを見ろ』と風はささやいた。

彼等は闇の中に目をやつた、

ひときは光をまして星が輝いてゐた、

遠い闇底に涙のやうににじんで大きく輝いてゐた。

その星は悲しまず、

嘆かず、

永遠の間の中に一段と光をまして、

輝いてゐた、

寒空さむぞらのなかに。

彼等は暫く黙つてゐた、

そして再び彼等も耳こすりした。

接吻しあつた。

風はそよそよと果もなくふいてゆき、

木の葉はまた一としきり身を烈しくふるはせた。

夜 曲

離れてゐる彼女に贈る

静かな世界で、

おれは君に語る。

ねがはくは君は永遠にわかくあれ、

ねがはくは君は永遠に微笑してあれ、

ねがはくは君は永遠に心静かであれ。

よし眠つてゐるとも、

よい夢を見んことを。

よい夢を見てつまらぬものに、

さまされないことを。

ああガラス窓にうなる蠅ひとつ、
赤くところ／＼と沈む西日、
ああ暮るる夜、
永遠の夜、
ねがはくはその暗に君にあいそよく、
美しい星あれ、
底びかりする星あれ、
なつかしい星あれ。

ああわれは君のかつて見た海をわすれず、
君の遊んだ濱を忘れず、
その海によな／＼うつる星のごとく、

荒いうねりに影うつす星のごとく、
われは君をば思ひだす、
われは君をば思ひだす。

幸 福

幸福といふものは鳥見たいなものだ、
この廣い野原の中にゐる。

聲が聞えるのはまだしもいい、
聲も形もかいくれ解らぬ事がある。

だがこの鳥を一度掴まへたらしめたものだ、
今度は掴まへた彼れがその鳥になる。

いくら何か出て來て邪魔したつて
もう駄目だ。

芥子粒のやうに小さくなつて、
夙に向うを飛んでゐる。

嵐 の 中 で

嵐に打たれてゐる人間はいふ、

おれは嵐の中だ、

おれのまはりは眞暗だ、

この嵐はどうだ、

だがその一陣の疾風の上に、

嵐雲の上に、

一羽の金の鳥が流れる様に平圓を描く。

熱を病んでる星

私は天上で無類の星だ、
綺麗な星だ。

だが自分はいろんな病ひにせめられてゐる、
むしむしした天上の悪熱だ！

ああ毒ガス！

だがこの毒ガスの中に渦巻いてる
この苦しさを見ろ。

毒ガスにたたられてゐるのだ、
この黒赤いまはりの空気に。

ああおれの赤くいき苦しい光が見えるか、
熱におかされてる赤い光が見えるか、
それはおれだ。

おれは黙つてゐる。

依然として黙つてゐる。

しかし之れはいいのだ。

おれは段々高熱に悩むだらう。

しかし之れは今迄病まないでゐた時より、
よくなつてゐるのだ。

おれは病むだらう、

今迄よりもつと高熱が出るかも知れない。

おれは今迄冷たい空を歩いた。
おれは太陽の光を反射したばかりであつた、
だが自分の光を出さずにゐられなくなつた、
ああおれのまはりは何て寒いのだらう。

泣 け よ

自分は君が泣くことを許す、
自分は君が泣くことを許す、
ああ泣けよ泣けよ、
汝の魂はその涙に洗はれん、
汝の心はそのために、
暗底すみぞこの星の如く雨にぬるゝとも、
しめるとも、
更にそれによりて光をまさん。

ああ泣けよ、

泣けよ。

汝の心の底より汲み出して、

涙なきまでなけよ。

汝の涙はかきことなし。

汝の涙は海より出づ。

汝の涙は雨後のすきとほれる海より出づ。

ああ泣けよ泣けよ。

汝の自然のために泣けよ。

われは泣くべきものに泣かざる人を愛せず。

嵐のあとのきよき野の如き顔せざる人を愛せず。

ああ泣けよ泣けよ。

誰が知つてゐる。

汝は愚鈍な木である。

葉はしげり、

梢はのび、

春が来れば、

花が咲き、

鳥も来て鳴く。

だが汝は愚鈍な木だ。

いくら花が咲いても、

鳥が来て鳴いても、

葉が茂つても、

梢が延びても、

汝は愚鈍な木に違ひない。

だがこの木が、

あの底光りする天上の二つ星を見てゐるとは、
誰れが知らう。

あの凄い底ばかりする星を見てゐるとは、
誰れが知らう。

曲つた木

或る木は若木わかぎのとき痺れ薬しびりぐすりをのまされた。

彼れは一生花も咲くことなくひよろりと大きく伸び育つた。

そこで通りかゝりの人間は變つた木だと、

その高い梢をながめた。

ところが不思議なことから、

梢に一つ花が咲いた。

ほんの小さい形ばかりの花だ、

そこで奇蹟が始つた。

彼れは舊來の毒血どくちに謀反をおこした、
そして身をもがき出した。

彼れには今二つのどちらが必要だ、

この過去の怨靈おんりやうを嘔吐おうどするか、

またはこの痺れ薬しびりぐすり以上の毒消し薬を飲むか……

だがさうしてる内に冬がやつて來た、

そして雪が降つた、

どんどん降つた、

眼もあけられない位降り込めた、

一と月も二た月も……

彼れは舊來の毒のきゝめで方々の節々が凍るやうな痛さを感じた。
何だか髓のあたりが筋をひいて痛み出した。
しかし心では重々しく思つた、
——ああ盛なる自然よ、
このどんだん降る雪のすばらしさよ。

被虐待者

寒む風のなかで私は幾人かの借金取りに逢つた。
どれもこれも業突く張りだ、
無理矢理おれから財布をとり
着物を取り、肌着一枚にした。
やがてその肌着もとつて自分を丸裸にした。

(おお烈しい吝嗇坊どもよ)

取ることより知らない人鬼達よ

最後の一匹まで逃しまいとする虱取り！)

さて此處でおれは丸裸にされて鳥渡することに困つた。

何だか平常と勝手が違つて鳥渡の間途方にくれた。
ところで傍に河があつたのでいきなりそれへ飛込んだ。
借金取りはびつくりして暫時あつけにとられた。
その間におれはすんすん泳ぎ出した。

やがて彼れ等はうしろから不意に喝采した。

今おれから取つた肌着股引着物を振つて喝采した。

だがおれはそんなものには目もくれずすん泳いだ。

(そんなにおれのする事が面白く見えるなら、

ちと君達もやつて見ろ！

若くはこの寒さらしの風のなかで、

せめて眞裸にでもなつて見ろ！

だがこれだけは考へて置け、

おれのする事は眞面目だが、

君達がすると酔興になるといふことを！)

ああ身を切るほど冷い河水を對岸を目あてにして、

あの雪に埋れた對岸を目あてにして、

おれは泳いで行く。

あああの對岸の美しいことよ、

向うの景色の鮮明なことよ！

私の心臓は寒さと四肢の烈しい動きと、

それにまたこの美しい景色を見る感動とで、

つぶれるやうだ。
それでも私は泳ぐ、
なほなほ泳ぐ。
溺れるか乗り切るかそれは知らぬ。
唯だ私はこの胸に脈打つ心臓と同じく、
動き出したら止まない力で前へ前へと泳ぎ出す。

冬越しの牧場

千年を千度^{せんた}び重ねてわれ等祖先のうへに溯る、
私は太古の穴居時代の夢を見た。
幾千年は瞬くまに過ぎて、その鐘乳岩の壁かがやく洞窟で、
私は最後に見つけた、ああ、その一とつまみの青草を！

いま私は現實の野外にゐる、
そこには外越しの青草が可愛げもなく色褪せて生えるころ、
しかしこの草がいつか桃色の花咲くときを感じて、牧場の柵に今いつまでもいつまでも
も倚つかかる……。

あたたかく春風は吹いた、
雪はとける、
日は赤い。

3 X 10.

小さい花

灰色の季節、

錆色なまりいろの雲、

白い粉こなのやうな雪がテラ／＼降り、

そしてその雪で包まれた野原に

紅かみい小さい花が咲く。

おお紅い小さい花が咲く、

その花に私はものをいふ、

お前は何時生れ、

何時育ち、

何時甯をもち、

そして何時その眞中^{まんなか}に黄色い蕊を持つ小さい花を開いたか。

私は旅人^{たびと}だ、

私はひとりぼっちだ

私は灰色のながい季節を迎へ

鉛色の雲を上^{うへ}にいただき

身にはチラチラと粉雪を受ける。

ああ赤い日が霧のなかにおぼれてゐる。

風は泣くやうにそよそよと吹く。

そのなかにお前は瞳のやうに咲く。

天上の戀

曉の眞蒼^{まっさむ}な空のうへに、

赤い雲がひと切れ浮んでゐる。

地上には嵐が吹いてるが、

人は未だ覺めない。

私は寢轉んで、

莧をのんでゐる。

布團の上にゴロ寢をしてるが、

まるでどこかの草原にでも寝てる様だ。

屋根屋根は灰色^{はいろ}で、

空はまつさをで、

その中に赤い雲がひと切れふわりと浮んでゐる。

その時私の心の中で蟲の様なものが一心に鳴いてゐる。

——ああ、戀だ、

もつともつらい戀だ！

さうに違ひない、

暗い、

盲目なもの、

耳にちぢちぢ……とひつきりなく鳴く。

——ああ、戀、

戀！

私はこの美しい、嵐の中の眞蒼な静かな天、
綺麗なヒステリーヒステリーの女の眼のやうな天を、
今戀してるのだ……

番人の娘を戀ふ

お前の心にえりつけよう、

私の心の底の文字を……

お前はそれを讀むか、

ああ黒い吾が夜々の夢よ。

わが夢は夜毎その字の意味を解き聞かせる。

ああ斯うしてつもりつもつた幾夜、

或る晩窓を開き、

遠くに光る星を見、

暗の中に揺れる樹を見、

つきなんとしてゐるお前の家の
有明の灯を見る。

ああこの闇の庭に來て鳴け、

可愛い雌鹿。

ああこの闇の庭に來て鳴け、

可愛い雌鹿。

お前の夜を守る灯を離れて、

吾が庭へ來て鳴け、

お前、可愛い雌鹿。

ああうれし、うれし、

お前に此の心の文字をえりつけよう。
ああ夜毎の夢にあらはれる文字、
心の奥底にしまつてある私の文字、
それをお前の心にえりつけよう。

荒 廢

荒い雲のなかに
隠されてる月は、
深夜の灰色の都會を
何と見るか。
とどろに吹きまはる疾風は、
遙かな地平線に落ちて行つて、
そこには黒い空、
もの寂びしく眠る屋根屋根の果て、
ああ下界は銀灰色に輝く太古の動物の背にも似て、

その歴史ない歴史の世を追想させる。

104

この中に私はあり

胸にふいご場のごときくわつくとした火を蓄へ、

聞くものは風に鳴る屋根、

時折り遠くで吠える犬、

ああその犬よ、何といふけたたましくも淋しい聲ぞ。

5 X 20

一人の旅人

お前を思はず秋となつて、

今はた思はず、戀を、

ねたみを！

華々しい秋口の烈しい日照り、

濃い青色の屋根越しの木々の、

涼しい風に揺られる午後。

時は過ぎて行く、

はためく店々の日覆ひ。

わが行く方に

104

いかめしくも美しい冬の、
われを待ちつつ
豹の如く覗ふ。

ああわたしは一人の旅人か、
たえず人寂びれた往還を歩み、
彼方廣い空にわだかまる銀の雲を、
目がけて歩む、
ひとりの旅人か。

獵 師

ああ、地に敷いた落葉、
そそり立つ骨まばらな老木、
いま私は銃を手にして、
鳩でもない、山鳥でもない、
その梢に鳴く頬白を射てやらうと、
なぜか鐵砲をむけてゐる。

ああ、なぜ小鳥を射る、
そのうつくしい聲の主を、
その聲があんまりよいもんだから、

私を魅いてしまふんだから、

原あり、

透きとほつてゐるたまり水あり、

木あり、巨大な枝をさし交してゐる老木おいきの林があり、

白い雲のなかに見える瑠璃色のおだやかな空あり、

枯れ草日に輝く草の床あり、

その景色にあの小鳥の聲があんまりするとく、心持よいもんだから

わが心に頭をもたげたいたづら心が、

お前のをねらはせたのだ。

私はお前を打ちはしない、

ただ野前がこの野原一面の沈黙を破つて、

不意に囀り出すとき、

私はそのするどい心持よさに釣られて、

無心に銃の筒先きをむけるのだ。

あゝするどい秋の野の朝景色、

この世はなぜに斯うもうつくしい。

船乗の歌

黄金の眼をむく般若の女王は、

邪慳でもない、意地悪でもない、

もつて生れた闊達な氣象で、

よこ波あびせて打つ船舷、

船はどんど太鼓打つ。

寝てゐるおれ達をあやすかの様に、

皆に子守唄でもうたつてくれるかのやうに！

ほんとに考へて見れば昨夜の荒もあれは荒でなかつたのかも知れない、

あいつの烈しい氣まぐれに過ぎなかつたのかも知れない。

うるしなす暗間を吹きまくつて行く疾風、

横沫きなす雨、

おれはその中で甲板を洗ふ波を見た、

波にさらはれた一つの人影を見た、

煙突から吹き散らかす火の子を見た、

斷末魔の病人のお祈りの手のやうに、

無神經に暗間にふられてる二本のマストも見た。

あれはいま皆どこへ行つた、

夢である、

消えてしまひ、しかも胸にいつまでも實在する悪夢である。

夢は實在する、

そして人生は常に變轉する夢にほかならない。

一一六

おもうても汗が出る、

あの暑くるしさ、

朱線の印度航路、

紅海の熱湯浴、

あれも夢である、

ただのこる、

あのいきれたつた大氣の心ゆくばかり抱きしめた感覺、
フランス女の淫賣婦にもまさるあの抱きしめ様！

海はおれ達を抱く、

おれ達をふり動かす、

おれ達をキツスする、

ときには唇を噛む、

咽喉をしめる、

狂氣的に、猛烈に！

ところが今はまた風いでゐる、

魔睡的な海、

夢見ごちの海、

おれ達を静かにあやし、

おれ達を静かにゆすぶり、

おれ達を静かにうとつかせ、

おれ達を静かに熟睡へおくる。

一一七

風いだ空には神でも居睡つてゐさうだ、
ただ青くひろびろと光いつ杯に漲り、
中天にボカンと輝く晝の日の黄金の、
おれはその黄金のみでない、
そばに輝く日中の金星も見つけた。

ここでおれ達船乗りの哲學を一つ語らう。

陸の世界は固くるしい、狭まくるしい、重くるしい、
おれ達船乗りには人生は善いもない、悪いもない、
も一つ上手の得體の知れないものだ、
色氣のない男まさりの處女の女王、

美しく凄いアマゾンはおれ達のお主だ、

おれ達の女主人は蟲の居どころ次第で天氣が變る、
なほまたどんな淫婦のたらかしにも、

どんな毒婦の殘酷にも、

どんな娼婦の陽氣にも、

どんな威嚴のある女王の表情にも、

負けない神通自在の變化を持つてゐるのは、

おれ達の女主人だ。

嵐、

熱風、

荒くれた土用波、

無風帯の脂を浮かした水平面、

無人の白い塔を押し流す寒流、

その極地の沿岸をあらふ三角波、

おれ達の女主人はこの光景のなかをも出沒する。

陸の人間界には律がある、固定がある、

おれ達船乗りの一等恐しいのは之れだ。

生命は不斷に流れる、

過去は夢の閑歴だ、

未來は霧である、

そこでおれ達の生涯も冒險的生涯だ。

もし人間がいつまでも若い氣でゐたいなら固定するな、

變現きはまらない海の女王を見習へ、

命の全額をお賽錢に投げだして、

自分の守り本尊にしろ。

おれ達は海に苦しめられるが海を憎まない、

しかし陸では法律に恵まれながら法律を憎む。

陸には教師はゐないが、

海には立派な導き手がゐる、

嵐はその鞭だ、

波はその接吻だ、

風は揺り籠のその白い手だ、或は臭い髪の毛をかいってくれるその櫛だ。

そして風ぎ！

風ぎは慈愛に充ちた美しい目の凝視だ、
 おれは陸上の口八釜しい虚榮坊の道學先生を憎む、
 人生は善でもない、惡でもない、
 そんな詮索だては此處では通用しない、
 此處では命の流れである、
 實在する夢の貯蓄である、
 未見に對するあこがれである、
 慈愛に充ちた海はおれ達を抱く、
 おれ達を揺る、
 おれ達をキツスする、
 ときには唇を噛む、
 咽喉をしめる、

狂氣的に、猛烈に、

ところが今はまた風いでゐる、
 魔睡的な海、
 夢見ごこちの海、
 おれ達を靜かにあかし、
 おれ達を靜かに舐ぶり、
 おれ達を靜かにうとつかせ、
 おれ達を靜かに熟睡へおくる。

晴れやかな空には神でも居睡つてゐさうだ、
 ただ青くひろびろと光いつ杯に漲り、

中天にボカンと輝く晝の日の黄金の、
おれはその黄金のみでない、
そばに輝く日中の金星も見つけた。

この残酷は何處から来る

どこで見たのか知らない、
わたしは遠い旅でそれを見た。
寒ざらしの風が地をドツと吹いて行く。
低い雲は野天を覆つてゐる。
その時火のつく様な赤ん坊の泣き聲が聞え、
さんばら髪がみの女が窓から顔を出した。

ああ眼を眞赤に泣きはらしたその形相、
手にぶらさげたその赤兒、
赤兒は寒い風に吹きつけられて、

ひいひい泣く。

女は金切り聲をふりあげて、びしやく尻をひつ叩く。
死んでしまへとひつ叩く。

風に露^{あは}かれて裸の赤兒は、
身も世も消えよとよよと泣く。

雪降り真中^{まな}に雪も降らない此の寒國^{かんごく}の

見る眼も寒い朝景色、

暗い下界の地に添乳^{そへち}して、

氷の胸をはだけた天、

冬はおどろに荒れ狂ふ。

ああ野中の端の一軒家、

涙も凍るこの寒空に、

風は悲鳴をあげて行く棟の上、

ああこの残酷はどこから来る、

ああこの残酷はどこから来る、

またしてもごとく吹く風、

またしてもよよと泣く聲。

發狂者の獨り言

戀は死よりも鋭い、

悲しい玻璃へ木立の浮模様が、

朗かな空、涙まじりの小鳥のおしやべり、

『御早やう、今日も御天氣で御座います……』

それつきりの沈黙、玻璃のフラスコ壺、

化學者が或る夜、紫の星を見た折り不圖感じた物思ひから、

入れた朱斑の目高魚一疋……

『ああ何ゆゑのこの朱ぞ、

ランプのハートの黒い變色、

品川沖の外國廢船の赤錆、

此の胸の奥に潜む云ひやうない苦しさ、
死の感激……』

朝風吹いて庭の枝々きしめけば、

君は天から天女のやうにふわりと飛んで來るかと思ふ……。

第
三
篇

感激

空しい月日のびんびんいとひき車、
古手ふるでの『人生觀』がこほんこほんと咳せきをして、
さて金錆きんさびびのした嘎がれ聲、

——感激とは萬葉の火の花だよ。

東洋の毛脛けいあらはな蟻あきの國

ながいものには卷まかれる國粹保存主義、

金甌無缺のわが帝土に

おう、お、わたし等の生涯はつねにづぶづぶ水浸し！

青年、青年、火の信仰、淨い熱、

わが眼は空かける大鳥のごとく此の墮落の國を俯瞰し看破しよう。
わが守り神、晴れやかな天、白い雲。
萬づ物みな新らしい芽生えの春、
わが心涸れしなびたれど、之れ思へば、
つねに死なず。

感 謝

わたし共にもやがて最後の時が来て、
この人生と別れるなら、
願はくば有難うと云つて此の人生に別れませう。

灰色の粉雪、七むつかしい顰めつ面の迷ひ雲、
雲は下界のあらゆる聴覺を障ぎり、
老と沈黙と追憶の、
ひとりぼつちの古美術品展覽會、
ああ、世の聾の老博士、無言教の寡婦さん、
子に先だたれた愁傷な親御達！

あなたがたの悔や嘆きもさる事ながら、
願はくば死ぬ時この人生にお禮を云つて御暇乞をして下さる。
それは慥かに人生に對する寛容の美德です。
惡に報いる金色の光り放つ善です。
生はそれぐらゐ氣位高く、強く、明るく、
情熱を以つて、
鏡のごとく果つべきです。

禮 儀

A MME. GOFIOUSSET.

裸ん坊^{はだかぼう}のわたしの心に、ああ天よ、花の紋うつくしい緑の晴れ着を與へたまへ、
わたしの眞率な心はこの氣高い『禮儀』にいままで心づかなんだ。

ああ五月！ 五月は野の林に卯つ木^{うつき}の白い花咲く月、

空には夏の威勢をはやも見せたる雲の *Warriors* の兜^{かぶと}のかけほの見えて、
初夏^{はつなつ}にふさはしい満目の輕げな装ひ、

その白哲人の腫に似た青い空……

水色の絹地におなじ水色レスの刺繡^{ぬいど}あるバラソルかざした彼女を先立てて、
その懐しい後影を見まもり進み、

青麥の畑路、垣根路、崖上の路をつつましく歩いてゆくとき、

この頃内しきりに思ひに沈み、言葉少なになつた吾が心は、いしくも此の『季節』の装ひに眼が觸れはじめ、徐々に感嘆の胸をひらき、幾度か立止つた、ああ御身美しい五月の野よ！

思へばこの永の年月いつも裸にして傷つき易く激し易かりし吾が心の木地、その裸なるをよしとし、露骨なるをよしとしたわが心の木地、ああこのわが心に以後御身の緑の晴れ着を與へたまへ、

おお天よ、美しい五月よ、

御身の容にあやかり、美しく心の装ひして御身にむかふのは、人のなすべきよい『禮儀』である。

おお、御身の容にあやかり、美しく心の装ひして御身にむかふのは、人のなすべきよい『禮儀』である。

哀 歌

また鶴が自ら長い線空につくり、
彼等の哀歌をうたひつゝ行くごとく

ダンテ『神曲』地獄篇第五曲

唇、抱擁、ああ八月の花に時ならぬ氷雨の雲の來襲！

花は見る間に振りおとされて、その白い花瓣を全身にあびた喪心の木二つ、
さながら地獄の骨まばらな木にも似て……

ああフランチスカとパオロ、

渴ける口に火の呼吸、

とさせる胸に情のたかまり、

御身等は死んだ、

嫉妬の黒い鋼鐵の劍。

それは恐らく私が夢見るのである、傷心の風俗畫……
疾風吹きめぐる地獄の空を、
顔見かはし相倚る二つの影。

ああフランチスカとパオロ、

戀の火の灰、

ふりそぐ雨、

御身等は死なぬ、

今の世にもそれあり……

騎士

Ma jeunesse ne fut qu'un ténébreux orage,
Traversé çà et là par de brillants soleils;
Le tonnerre et la pluie ont fait un tel ravage,
Qu'il reste en mon jardin bien peu de fruits vermeils.

Charles Baudelaire.

わが露な胸が初めて君の赤い唇をうけ、君の唇を押しあてられた一瞬時、
わが二十幾年の孤獨の境涯底ふかく秘められた黒い鐵櫃は、
奇しくも黄金の十字の紋章かどやきいだし、感激に眩めく一使徒がパプテスマの河を
よるめき足して岸に這ひあがるごとく、
わが多端にして光あふるゝ未來の陸地へとわたしはよるめき押しだされた。

敗残のわが旗を新しく染め、黄金の色燦たる十字の紋章をしるし、
今わたしは君の前へと敬虔にひざまづく裸の騎士、

戀は快樂でない、心の輝きである、おゝわが胸よりこの神を放したまはされ！

胸に感激のこの火花ひらめき出でしときわが鼓動の鳩尾に君の唇はこれを感じたまふ
たか。

今世界は黒い旗をおろし、青空の幕をかゝげ、その中天に仰げとばかり、
破るゝがごとき光こぼつ日を照らし出した、ああこの最初のキス。

鴿

狂はしい位魅方ある海の彼力を遠くにかいま見つゝ、
その金剛石に輝く空のひかりを、

(彼處にはよい國あり……)

いま見くらべて悲しみ嘆くああ眼下のわが古巢の土地、
そこには起伏する山河幾百里のうねり、

たはむれる獸、遊ぶ鳥の影ひとつ見えぬおびえの國、

ああ蹊の赤い脚さへおろし得ぬ土地に今空より優しい聲をおとし、
御身等のよい心のために祈らう、鴿の鳥、

ああ祈らしめよ、祈らしめよ、この人生の逆風に吾が弱い心のまた吹きおとされぬや

う、

ああ祈らしめよ、祈らしめよ、片羽^{かたはね}おとして死身^{しんみ}に飛ぶ『生』の險路のまた突きやぶれるやう。

(わたしは微笑^{ほゑ}を欲す……)

そして天^{あま}がけり、青い空をゆき、御身^{おんみ}等のうへに、
この胸にひそむ火の叫びを雪ふらさう、わが希^{ねが}ひとして……！

夜　語　り

Well my dear, あれはお伽話見たいな話だよ、

おれもお前も知らない世界、

雪降る窓に燭^{ろう}の灯あかあかと、

家内そろつてお年越しの祭り……

(丸太小舎には息吹^{いきぶ}く年の瀬。)

Well my dear, あれは遠い遠い向うの國のことだね、

おれもお前も知らない國のこと、

銀紙のピカピカ光る小枝に綿^{さし}の笹^さ縁^{へり}の雪、

七面鳥と土産の麥酒に笑ひさざめく一家内。

(丸太小舎には降りつもる年の雪。)

Well my dear, あれは私等の國にはない、

俺もお前も話で聞いた土地風俗、

そして夜更となり、村中寝沈まり、

はためく吹雪のなかの煙突。

(丸太小舎には此の頃忍び込む、例の赤装束のお爺さん。)

Well my dear, あれはあの國の面白い人情だね、面白い人情……

おれもお前もほほゑむ世界、

ところであの國の人間は今闘つてゐる、

そしてあ彼の一夜の祝ひ、

敵も味方も抱きあふ雪の原つば、

兵隊外套連の交歡の賑ひ。

(丸太小舎には老の夫婦、夜半頃から鳴きだす蟋蟀。)

作者註。この作は歐洲戰爭中獨逸軍と聯合軍とが特にクリスマスの夜のみは戦ひをやめて敵味方打交り隨所に會合して當夜の祭を祝し合つたのを思ひ出して書いたものである。年の瀬年の雪とは歐洲の習俗にて當夜の祝ひが日本の大晦日の年越しの祝ひの如き氣せられるより用ひた言葉である。なほ蟋蟀は彼地にては當夜あたりまで爐邊に棲息するが如し。

苦 惱

一四八

わたしの心惡鬼^{あくき}のやうに物皆かなぐり棄てて髪振り亂し、
この人生に立ち迎へ、おお！

恍惚の日、初めて唇と唇を合せた日、一週日のあと、
この險惡な嵐の心にわたしは落つ。

おお何ものがわたしを斯くするか、斯くするかよ！
雨よ打て、わが鞭となり、

風よ吹け、その夜の黒い汗を無限にゆらめかし、
そして此の惱みに沈む青年の亂髪を思ひのまゝに梳づれ。

ああ生は見よ、私のために高く攀ぢがたい門となつた。

ああ戀人よ、遠くに靜かに眠る戀人よ、
身はのめり、魂は死し、
その上に狼は
足を踏まへて闇のなかに吠える！

812.

一四九

過去

自然は私に教へた、わたしの心は青く硬い果のやうであることを。

わたしの今の時期はああ、その果を眞茂る葉から日にさしのばす初夏の時期
わがために短かつたあの春は嵐の哮りに、暗い氷雨の打撃に、
さむい天氣の打續きに、

幾團の花はもぎとられてしまひ、

残りのものに何時知らず孕みし果……

おお指折りへ數よ、この可憐な生のしるし、

心細くも青天井の空を葉越しに垣間見て、
今むかへるや無辜の石室の囚人のやうに、

この華かな七月の日を！

おお幼年の時から青春まで幾つのわたしの絶望、荒い心の傷、あの黒い吐血の追憶、
今この美しい空のもとに何事もなく、

すべては清けだち、晴れ晴れし、萬のもの賑かに、
木下の風はなかを無心に吹きめぐる……

さらにその微風に乗つてひびいて來る優しい羽音、
わが華奢な明るい戀人、黒と黄だんだらの尾の蜜蜂、
荒い自然の揺ぶりも、今は吾れには唯だ唄とのみなる……

出 發

一五二

私の生活は始まつた。

野中の二岐路に咲く黄色の蒲公英、

そこには吾が過去の脱衣所あり、

吾が裸足の足を立つべき芝草の褥あり、

季節は春、その朗らかな晝空に漂ふ白い雲、

この雲のため、ああこの雲のため、私は一生口を噤んでもいいまい、

そしてこの二岐路のひとつを選んで古代希臘青年のやうに駆けださう。

人を囚へて悪逆の淵に突きおとす人生の禍つ事、

私はそれをも身輕に飛びこさう。

例しへない吾が生、青春と明るさと大膽と……

私はそれをもつてこの春の地を駆け出さう。

一五三

慰 安

君の前に今わたしが捧げる此の野咲きの薔薇、粗野にして田舎娘のとき可憐なこの
紅い花を、

おお青空がもとの墓石よ、

小さい名もない路傍の墓石よ、

吾がつつましい春日の旅の第一日に、君が無言の膝の装りとなすを容したまへ、小
さい名もない路傍の墓石よ、墓石よ、

死の標たる君のまへに春はまた輝き、

暗い冬の夜の呻吟に悩ませられた北方漂泊者のわたしは、
いまその雪と泥との着物をぬぎ、

古ぼけた杖を棄て、

鋭どく明るく詩のごとく、また一人の勇者を送る莊嚴の獨唱のごとく、
この春日のもとに君のことを考へる、小さい名もない墓石よ、墓石よ。

ああ春日よ、春日よ、

ああ死よ、睡眠よ、

君達の虚心の輝きは、

わたしの上に情熱の淨かな行手を示し、

おおそしてそして、此の名もない路傍の墓石は、墓石は、

わたしの生のため深い慰めを與へる……

恢復

人生は苦難と愛の庭、

荒い心に溫柔をつつみ、

眞茂る木の葉に紅い實點々と、

秋の日照りに槿の並樹の、

遅しく足を揃へるその苔青い幹。

やがては冬來り、葉は落ち、

枝はささくれ立ち、

あの險しくも白眼をした雪もよひの空、

寒い雨、

地凍る霜の夜明け、

君の呻きは細枝をふるはし、低い空を嘯かう。

缺乏の黒い感情、

苦痛に充ちた忘失の眼、

この身にふりかかる苦しみの出所は何？

やがては池の氷も黒ずみ、

廣い畠地は割れ、

さびしくも小鳥鳴き、

天地ことかはる季節のさかひに、

君はその時見ぬか、ああ見ぬか、暗く嚴かに淋しくまた賑かな春と冬の分れ目を！

空は暗く、風は低く、日は短く、
しかし何處にか胸にはらむ恢復の希望……

8 IV 4.



大正九年六月二日印刷
大正九年六月十日發行

(定價金壹圓貳拾錢)

著 作 者

福 士 幸 次 郎

發 行 者

東京市牛込區矢來町三番地中の丸
佐 藤 義 亮

◀ 望 展 ▶

發 行 所

東京市牛込區矢來町三番地
新 潮 社

電話番町(長)八〇九九番
振替東京一、七四二番

印 刷 所

東京市神田區宮本町五番地
電話下谷四〇六七番

新 潮 社 印 刷 部

(印 刷 者)

高 橋 治 一

□ 類集詩版出社潮新 □

泰西名詩選集					■ 廢	■ 民	■ 野	■ 小曲及散文詩	■ 春月
第一編	第二編	第三編	第四編	第五編	園(改版)	衆詩篇	天の光り	幻の日に	小曲集
ハイネ詩集	ホイットマン詩集	ゲーテ詩集	エルクレーヌ詩集	トラウベル詩集	三木露風氏著	福田正夫氏著	千家元麿氏著	白鳥省吾氏著	生田春月氏著
生田春月氏譯	白鳥省吾氏譯	生田春月氏譯	川路柳虹氏譯	福田正夫氏譯	定送料金	定送料金	定送料金	定送料八十五錢	定送料七十五錢
郵送料金八壹錢圓	郵送料金八壹錢圓	郵送料金八壹錢圓	郵送料金八壹錢圓	郵送料金八壹錢圓					

